

2012年9月30日・公明新聞「文化」欄では

## 『脱原発・自然エネルギー 218人詩集』を刊行

賢治と共に他者の幸福を願い 日英対訳で福島悲劇を発信

人間にとって本当の幸福とは何だろうか。そんな問いを発すると、必ず私は宮沢賢治が『農民芸術概論綱要』で記した「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉を想起する。

福島原発事故を経験した状況をどのように考えたらいいだろうか。私たちの身も心も本当は46億年もの自然の営みから創り出されたものだ。私たちの存在はいつかその自然の源に還っていく宿命を負っている。日本人は人の命の儚さを知り、日本列島の豊かな四季の中で慎ましやかに生きてきたのではなかったか。

しかし人間は原発を動かす限り半減期2万4千年もの猛毒のプルトニウムなどを産出している。その危険性は3・11前から多くの人びとから指摘されてきたが、詩人たちも詩篇を通して警告を発していた。

私はそんな詩人たちの力を結集して『脱原発・自然エネルギー 218人詩集』（日本語英語合体版）を刊行した。その詩集に収録された詩篇は、詩誌「コールサック」（石炭袋）で公募し集まった詩篇と、私を含めた6名の編者たちからの推薦された詩篇の中から最終的に決められた詩篇だ。日本の詩人195人、海外詩人23人の詩篇から成り立っている。

また218名の詩篇は7名の英文学者でバイリンガル詩人たちによって英訳され、右開きが日本語詩集、左開きが英文詩集となり、福島悲劇的な経験とそこからどのように未来を築いていくかという課題を世界中の人びとに読んでもらいたいと考えている。

詩人にとって他者の幸福を願って書くことは可能だろうか。今回の詩集に参加された詩人たちは、そんな問いを自己に突きつけて参加してくれたのだろう。「石炭袋」とは、賢治の『銀河鉄道の夜』の9章に出てくる言葉で、「暗黒星雲」、「異次元の入口」などの意味だが、なぜか私には「愛する死人たちが今も住んでいる場所」のようなイメージを感じたのだ。多くの詩人たちが「コールサック」（石炭袋）に結集してくれた理由は、きっと賢治の他者の幸福を願う精神を共有しているからだろう。

詩人たちは、地球の未来の他者の幸福を願って詩作しているのではないか。今回の詩集の一章「予知されていた悲劇」は、原発が大変な悲劇を引き起こすことを警告していた。二章「繰り返された過ち」は、原爆と原発が同じもので放射能汚染の危険性を記していた。三章「メルトダウンを見つめて」は、原発事故の事実を直視して未来への教訓とする。

四章「悲しみの場所・福島」は、福島在住や福島出身の詩人たちが故郷の破壊されていく悲しみや不安な心持を刻んだ。五章「被曝した子供たちの未来」は、父母の観点から子供の細胞を傷つける放射性物質の恐怖を語り出す。六章「故郷に原発が存在する」は、故郷に原発が存在することの恐れをリアルに語る。七章「脱原発の神話を」は、原発神話の代わりに脱原発を成し遂げる神話を創り出すべきだという。

八章「海から聞こえてくる声」は、地震・津波の死者への鎮魂の思いを抱えて脱原発を語る。九章「太陽と地球からの訴状」は、地球や宇宙の生きものから人間の身勝手な行動に訴状が届いていると指摘する。十章「人に優しい電気をつくるために」は、自然エネルギーを創出するしなやかな発想が語られる。十一章「福島に寄せる海外詩人の詩篇」は、海外の詩人たちが地震津波や福島悲劇を自分のことのように記す。

いつもは詩を読まない人たちにこそこの詩集を読んでもらいたい。（すずき・ひさお）

と紹介されています。